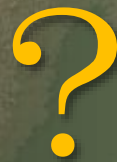


A stylized, dark-toned map of East Asia, including China, Korea, and Japan, serves as the background. The map uses a color palette of dark blues, greens, and browns, with white lines indicating coastlines and major rivers. The text is overlaid on this map.

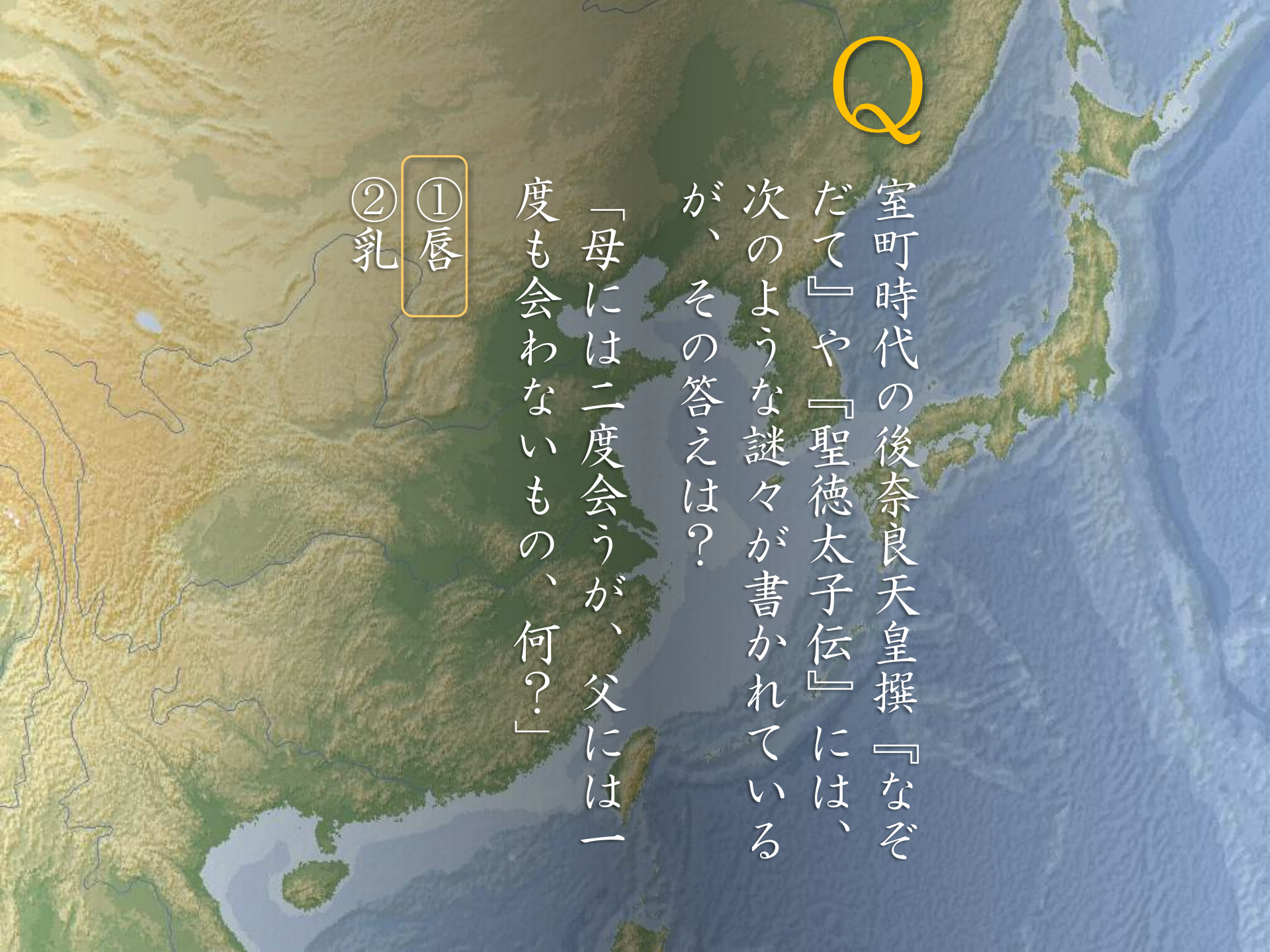
中国の文化Ⅲ

日中文化交流史

第五回 民間貿易の時代（下）



日本では民族文字であるかなが
できた後も漢字が使われていま
すが、それはなぜですか？



Q

室町時代の後奈良天皇撰『なぞだて』や『聖徳太子伝』には、次のような謎々が書かれているが、その答えは？

「母には二度会うが、父には一度も会わないもの、何？」

①唇

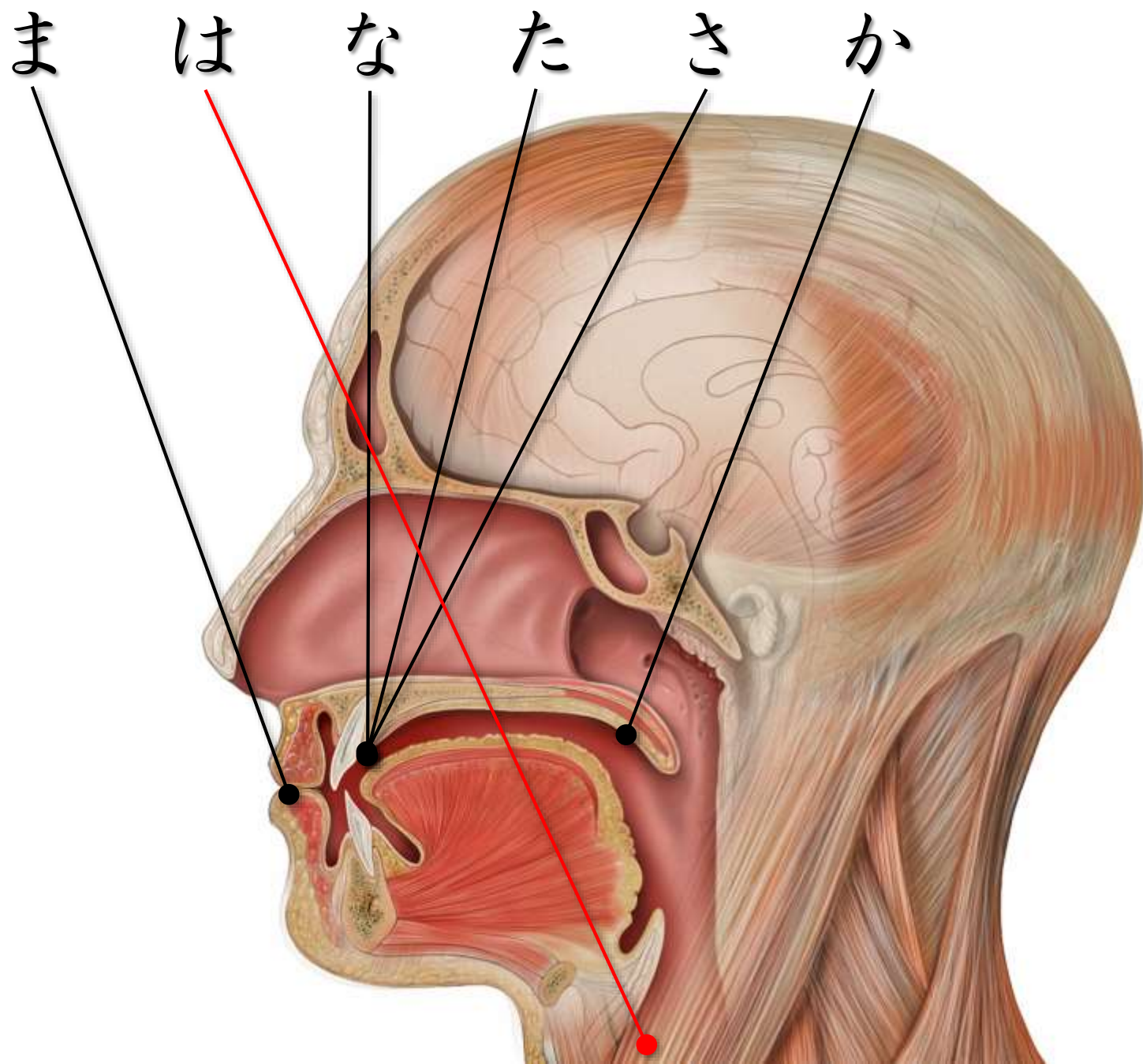
②乳

五十音図*のしくみ

* 五十音図は平安時代に仏教経典の中のサンスクリット語の字母表をもとに作られた日本語の音韻表

半母音			子音							母音			
口先←——→口の奥			口先←————→口の奥										
唇	舌尖	舌中	唇			舌尖			舌奥				
w	r	y			(ϕ)			z/s		摩擦音			
				b/p			d/t		g/k	破裂音			
			m			n				鼻音		前	後
わ	ら	や	ま	は		な	た	さ	か	あ	a		広
ゐ	り		み	ひ		に	ち	し	き	い	i		狭
	る	ゆ	む	ふ		ぬ	つ	す	く	う		u	
ゑ	れ		め	へ		ね	て	せ	け	え	e		中
を	ろ	よ	も	ほ		の	と	そ	こ	お		o	

現代日本語の子音の調音点



中世日本語の八行の調音点

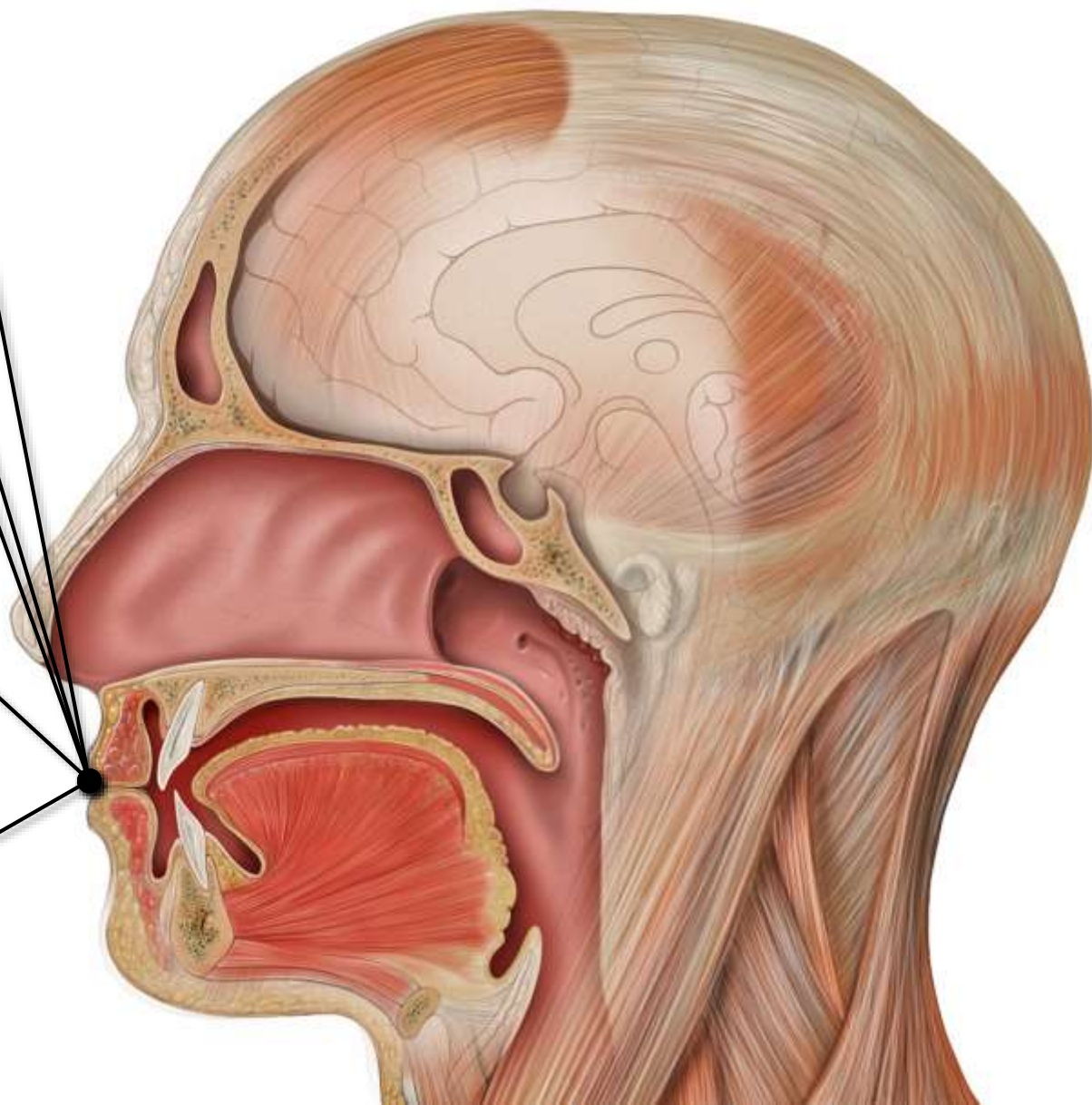
は[ɸa]

ひ[ɸi]

ふ[ɸu]

へ[ɸe]

ほ[ɸo]



現代日本語の八行の調音点

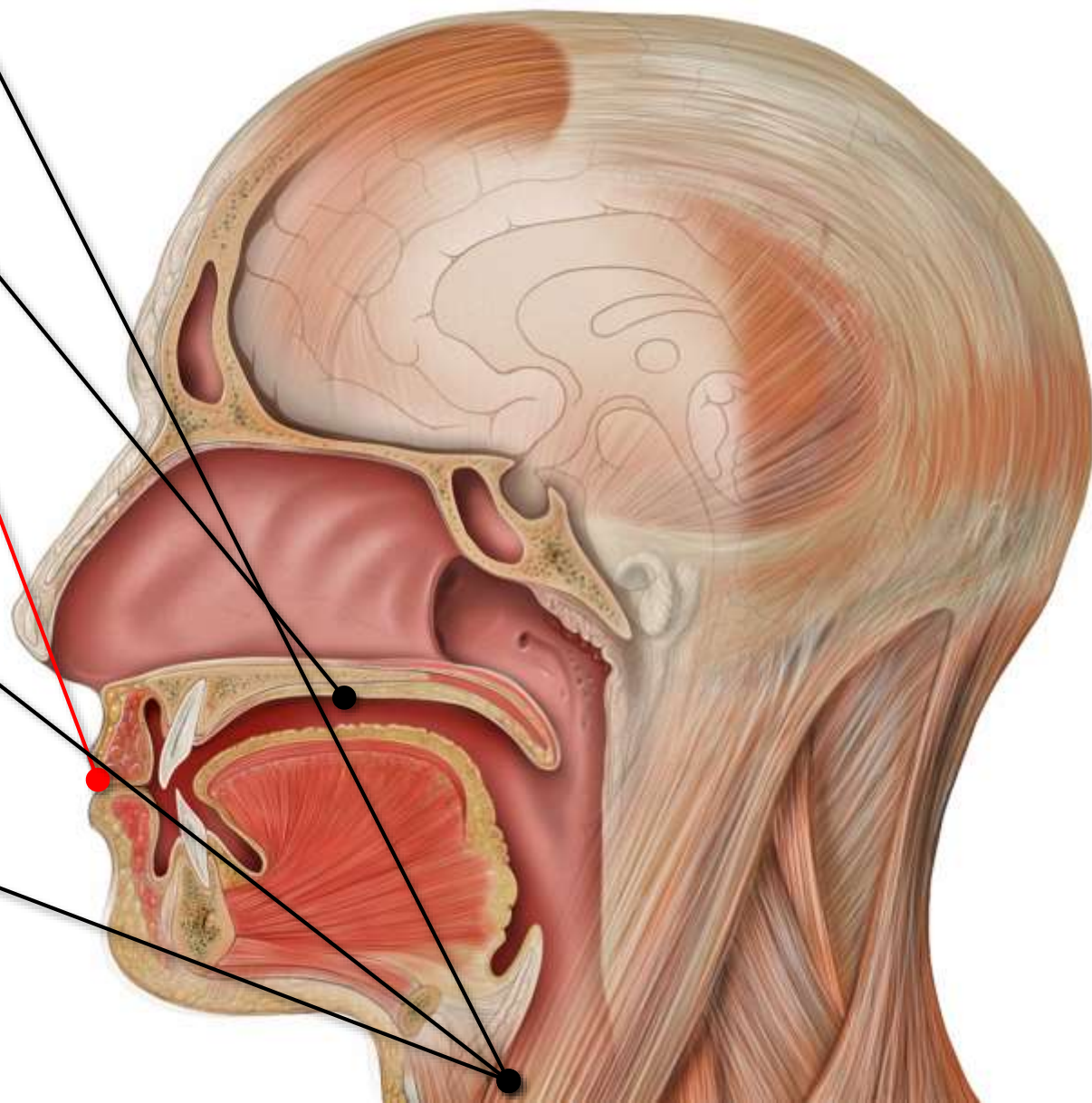
は[ha]

ひ[çi]

ふ[ɸw]

へ[he]

ほ[ho]



Q

蝶々のことを旧仮名遣いでは「てふてふ」と書くが、それはなぜか？

①古代日本語で蝶のことを「てふてふ」といったから

②遣唐使が伝えた「蝶」という漢字の中国語の発音が「てふ」であったから

第二 蝶々

一 てふく。てふく。菜のをにとまれ。
なのはふあい。くら。櫻にとまれ。
櫻のをなの。さかい。るみ。より。

表音文字の問題点

発音は時代とともに変化する。

「てふ」は遣唐使が伝えた唐代の

「蝶」の発音(てつ)を当時の日本語

の発音で表記したものだ。が、その後、

日本語の「ふ」[p]が「う」[w]に変

化し、さらに「てう」[teu]が「ちよ

う」[tɕo:]と変化したため、表記と

発音の間にずれが生じた。

第二 蝶々

一 てふくてふく。菜のたにとまれ。
なのはふあいしら。櫻にこまれ。
櫻のもなのさ。かゆるみより。
とまれよあそぶあそぶよこまれ。

民族文字と漢字の併用

二 おきよ。ねぐらけすめ。
てふてふてふ。なのはにとまれ。
朝日のひかりのけしめきたよ。
ちようちちようちちよう

な は と

蝶々蝶々

菜の葉に停まれ

あそぶよすめ。うたよすめ。

ヨーロッパの宣教師が見た漢字

東アジアの文化は、西域から伝わった仏教經典に代表されるように、中国語で記録され、漢字によって東アジア全体で共有化されていた。

明末に中国で活躍したイエズス会宣教師のマテオ・リッチは、同会への通信の中で、東アジアでの漢字の意義を絶賛している。



Matteo Ricci, S.J. (1552-1622). Portrait by Ottavio Leoni. The inscription below reads: "MATTHEVS RICCIVS MACERATENSIS QVI PRIMVS E SOCIETATE EVANGELIVM IN SINAS INVEXIT OBIT ANNO SALVTIS 1610 ÆTATIS 60."



ヨーロッパの宣教師が見た漢字

この文字(漢字)を使う国民は、たとえ非常に言語の異なった国民の間でも、みな文字や書物を介して相互に理解できるということです。西洋の文字ではこうは行きません。

マテオ・リッチ通信一五八三年二月十三日
平川祐弘『マテオ・リッチ伝1』

(東洋文庫一四一、平凡社、一九六九年)



ヨーロッパの宣教師が見た漢字

それだから日本とシャムと中国は、それぞれ別個の大国で、言葉もまたまったく違っているのですが、相互理解が非常によく行なわれ、同じ文字が各国で使われているようです。

マテオ・リッチ通信一五八三年二月十三日
平川祐弘『マテオ・リッチ伝1』

(東洋文庫一四一、平凡社、一九六九年)

A background map of East Asia, showing the Korean Peninsula, Japan, and parts of China and Russia. The map is rendered in a muted, earthy color palette with topographical details like mountains and rivers.

Q

韓国では戦後、表音文字であるハングルのみの使用を推進してきたが、二〇一四年、政府は教科書への漢字併記による漢字教育の復活を発表した。これに対して先生や生徒の反応は？

①先生も生徒も反対が多かった

②先生は賛成が多かったが、生徒は反対が多かった

韓国の小学校教科書の漢字併記問題

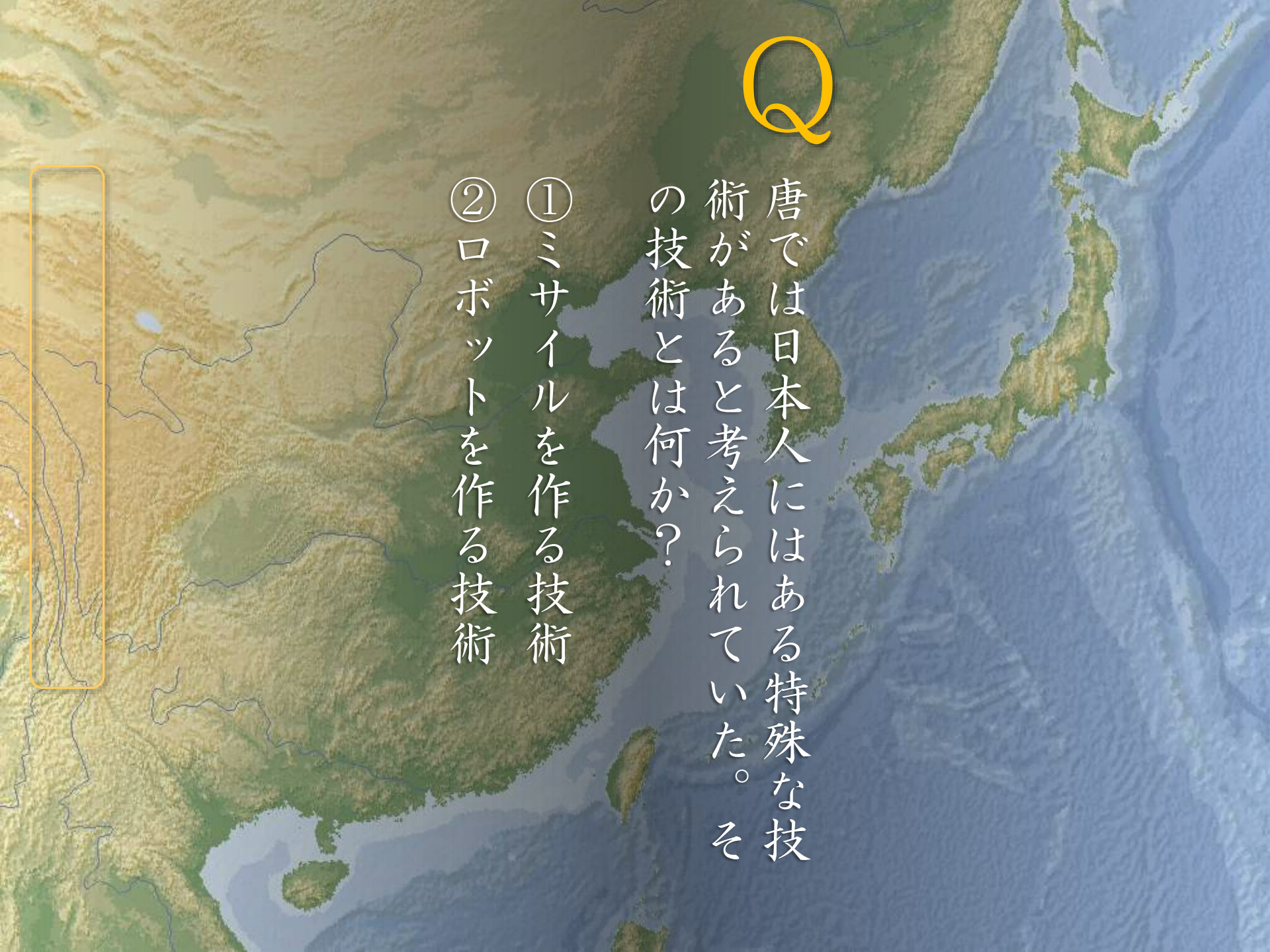
韓国の全国教職員労働組合が、小学校四年生から六年生の一四〇〇人を対象に教科書の漢字併記について尋ねたところ、七八%が「反対する」と答えた。また全国の二二〇〇人の小学校教師を対象に行った調査では、八七・八%の教師が「漢字併記に反対する」と答えた。

韓国『ハンギョレ新聞』二〇一五年九月四日





第三節 民間交流が生んだ新たな 日本のイメージ

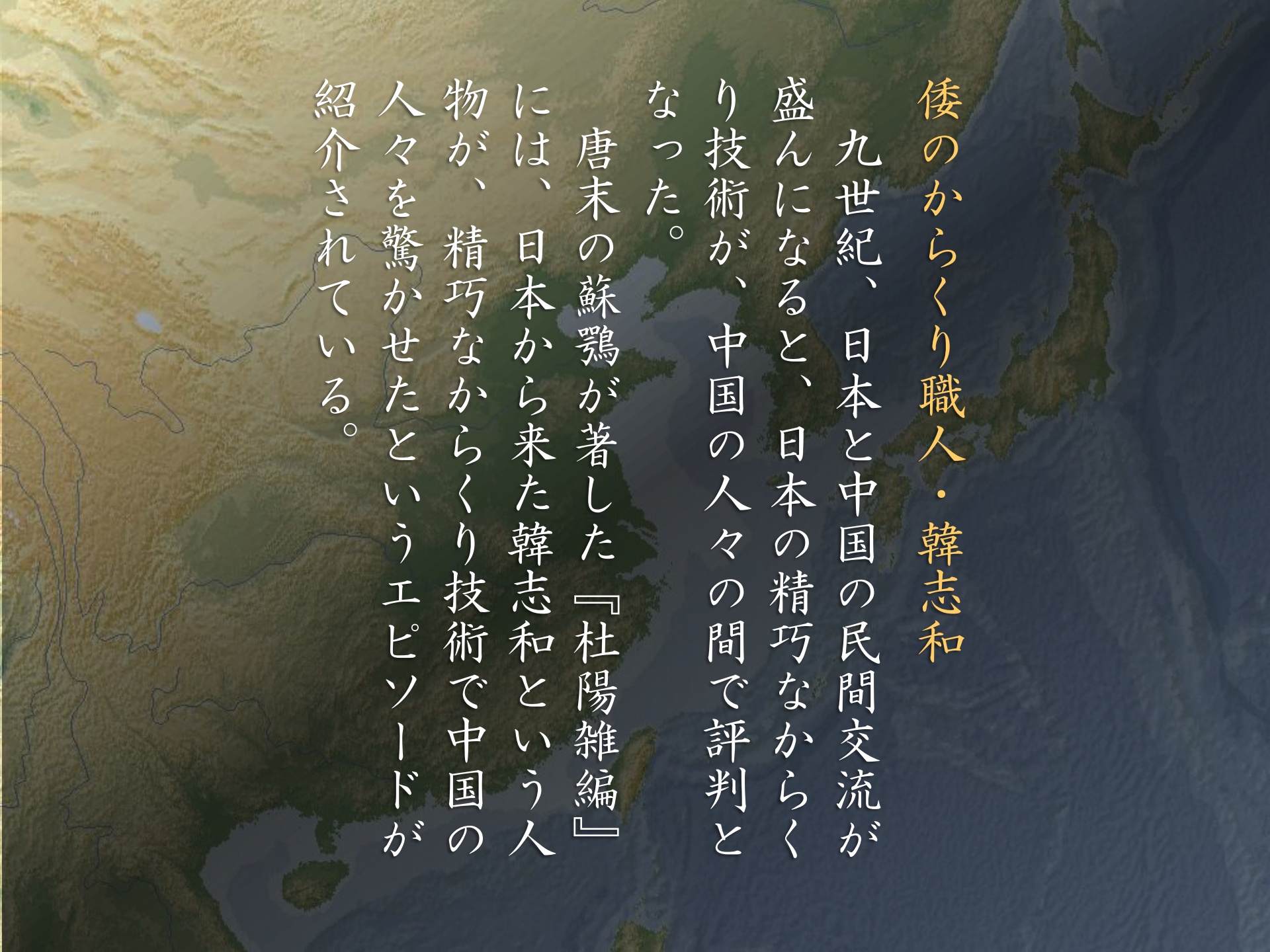
A topographical map of East Asia, showing the Korean Peninsula, Japan, and the surrounding seas. The map uses color to indicate elevation, with greens for lower land and browns/yellows for higher terrain. A large yellow letter 'Q' is positioned in the upper right. A vertical orange rectangle is on the left side, highlighting a portion of the Korean Peninsula.

Q

唐では日本人にはある特殊な技術があると考えられていた。その技術とは何か？

- ①ミサイルを作る技術
- ②ロボットを作る技術

ホンダ ASIMO 指揮・デトロイト交響楽団演奏
「インポッシブル・ドリーム」 (2008年5月13日)

A stylized, textured map of East Asia, showing the Korean Peninsula, Japan, and parts of China. The map is rendered in a dark, muted color palette with a grainy, aged appearance. The text is overlaid on the map, with the title in gold and the main text in white.

倭のからくり職人・韓志和

九世紀、日本と中国の民間交流が盛んになると、日本の精巧なからくり技術が、中国の人々の間で評判となった。

唐末の蘇鶚が著した『杜陽雜編』には、日本から来た韓志和という人物が、精巧なからくり技術で中国の人々を驚かせたというエピソードが紹介されている。

倭のからくり職人・韓志和

飛龍衛士の韓志和はもと倭国の人

である。木工細工を得意とし、いろいろな鳥の姿を作った。その動きは本物そっくりだった。腹の中にしかけを入れ、飛ばすと勢いよく舞い上がり、三尺ほどの高さで一、二百歩も飛び続けた。

〔唐〕蘇鶚『杜陽雜編』卷中韓志和（說郭所収）

飛龍衛士韓志和本倭國人也善彫木作鸞鶴鴉鵲之狀飲啄動靜與真無異以關戾置於腹内發之則

杜陽雜編

卷中

人

凌雲奮飛可高三尺至一二百步外方始却下兼刻木爲飛雀飛龍使異其機巧遂以事奏上觀而悅之志和更彫踏床高數尺其上飾之以金銀絲繪謂之見龍床置之則不見龍形踏之則鱗鬣爪牙俱出及始進上以足履之而龍夭矯若得雲雨上怖畏遂令撤之志和伏於上前曰臣愚昧致有驚忤聖躬臣別進薄技稍娛至尊耳目以贖死罪上笑曰所解技何試爲我作之志和遂於懷中出一桐木合子方數寸

倭のからくり職人・韓志和

志和は懷から数寸四方の桐の箱を一つ取り出した。中には蠅虎子というものが一、二百個余り入っていた。……五隊に分けて涼州の舞を舞わせ刻るといふ。雀飛龍使異其機巧遂以事奏上觀而悅之

志(唐)蘇鶚

『杜陽雜編』

卷中韓志和(說郭所収)

見龍床置之則不見龍形踏之則鱗鼠爪牙俱出及始進上以足履之而龍天矯若得雲雨上怖畏遂令撤之志和伏於上前曰臣愚昧致有驚忤聖躬臣別進薄技稍娛至尊耳目以贖死罪上笑曰所解技何試爲我作之志和遂於懷中出一桐木合子方數寸中有物各蠅虎子數不啻一二百焉其形皆赤云以

丹砂啗之故也乃分爲五隊令舞涼州上令召樂以舉其曲而虎子盤旋宛轉無不中節每遇致詞處則隱隱如蠅聲及曲終纍纍而退若有尊卑等級志和臂虎子於上前獵蠅於數百步之內如鷄捕雀罕有不獲者上加其小有可觀卽賜以雜絲銀碗志和出官門悉轉施于他人不逾年竟不知志和所在

倭のからくり職人・韓志和

陛下が樂師に命じて曲を演奏させると、リズムに合わせて、くるくると踊り出し、言葉を発する場面ではなにやら蠅のような音を立てる。曲刻が終わると、尊卑の等級があるかように心和累々として退いた。以金銀絲繪謂之

見龍未躍之則不見龍形踏之則鱗鬣爪牙俱出及始進上以足履之而龍天矯若得雲雨上怖畏遂令

撤之志和伏於上前曰臣愚昧致有驚忤聖躬臣別進薄技稍娛至尊耳目以贖死罪上笑曰所解技何試爲我作之志和遂於懷中出一桐木合子方數寸中有物各蠅虎子數不啻一二百焉其形皆赤云以

丹砂啗之故也乃分爲五隊令舞涼州上令召樂以舉其曲而虎子盤旋宛轉無不中節每遇致詞處則隱隱如蠅聲及曲終纍纍而退若有尊卑等級志和臂虎子於上前獵蠅於數百步之內如鷄捕雀罕有不獲者上加其小有可觀卽賜以雜絲銀碗志和出官門悉轉施于他人不逾年竟不知志和所在

倭のからくり職人・韓志和

陛下はなかなかの見ものであつたと、雑綵、銀椀を下賜された。志和は宮廷の門を出ると、それらをみな人に分け与え、その年の中に所在が刻わからなくなつてしまつた。奏上觀而悅之

志(唐)蘇鶚

『杜陽雜編』

卷中韓志和(說郭所収)

見龍床置之則不見龍形踏之則鱗鼠爪牙俱出及始進上以足履之而龍天矯若得雲雨上怖畏遂令撤之志和伏於上前曰臣愚昧致有驚忤聖躬臣別進薄技稍娛至尊耳目以贖死罪上笑曰所解技何試爲我作之志和遂於懷中出一桐木合子方數寸中有物各蠅虎子數不啻一二百焉其形皆赤云以

丹砂啗之故也乃分爲五隊令舞涼州上令召樂以舉其曲而虎子盤旋宛轉無不中節每遇致詞處則隱隱如蠅聲及曲終纍纍而退若有尊卑等級志和臂虎子於上前獵蠅於數百步之內如鷄捕雀罕有不獲者上加其小有可觀卽賜以雜綵銀椀志和出官門悉轉施于他人不逾年竟不知志和所在

A topographical map of East Asia, showing the Korean Peninsula, Japan, and the surrounding seas. The map uses color to represent elevation, with greens for lower land and browns/yellows for higher terrain. The Japanese archipelago is visible on the right side of the image.

Q

当時、日本では本当にロボット
が作られていたのか？

①作られていた

②作られていなかった

古代日本のからくり技術

日本の精巧なからくり技術が、大陸で評判になっていたころ、日本国内でも高陽親王（かやのみこ、賀陽親王（七九四〜八七一年）のことか？）が作ったからくり人形が人気を博していたことが、『今昔物語集』巻第二十四に記録されている。



Q

高陽親王（かやのみこ）は、何
のためにからくり人形を作った
のか？

- ① お茶を運ばせるため
- ② 水田を旱魃から救うため

高陽親王人形を造りて

田の中に立つる語

今は昔、高陽親王*と申す人御し
けり。此れは□天皇の御子なり。極
めたる物の上手の細工になむ有りけ
る。京極寺と云ふ寺有り。其の寺は
此の親王の起て給へる寺なり。其の
寺の前の河原に有る田は、此の寺の
領なり。而るに、天下早魃しける年、
萬の所の田皆焼け失せぬと惶(のの
し)るに、増して此の田は賀茂川の
水を入れて作る田なれば、其の河の
水絶えにければ、庭の様に成りて、
苗も皆赤みぬべし。

『今昔物語集』卷第廿四

*高陽親王(かやのみこ)・桓武天皇の第十皇子・賀陽親王(かやしんのう)、七九四〜八七一年)のことか。

高陽親王人形を造りて

田の中に立つる語

而るに高陽親王此れを構へ給ひける様、長四尺許なる童の、左右の手に器を捧げて立てる形を造りて、此の田の中に立てて、人其の童の持ちたる器に水を入るれば、盛り受けては即ち顔に流れ懸かる構を造りたりければ、此れを見る人、水を汲みて此の持ちたる器に入れば、盛り受けて顔に流れ懸かり流れ懸かりすれば、此れを興じて聞き繼ぎつつ、京中の人、市を成して集りて、水を器に入れて見興じて惶（ののし）る事限無し。

高陽親王人形を造りて

田の中に立つる語

此くの如く爲る間に、其の水自然ら□て、田に水多く満ちぬ。其の時に童を取り隠しつ。亦水乾きぬれば、童を取り出だして田の中に立てつ。然れば亦前の如く人集りて水を入れる程に、田に水満ちぬ。此くの如くして、其の田、露(つゆ)焼けずしてなむ止みにける。此れ極じき構なり。此れも御子の極めたる物の上手、風流の至る所なりとぞ、人讃めけるとなむ、語り傳へたるとや。



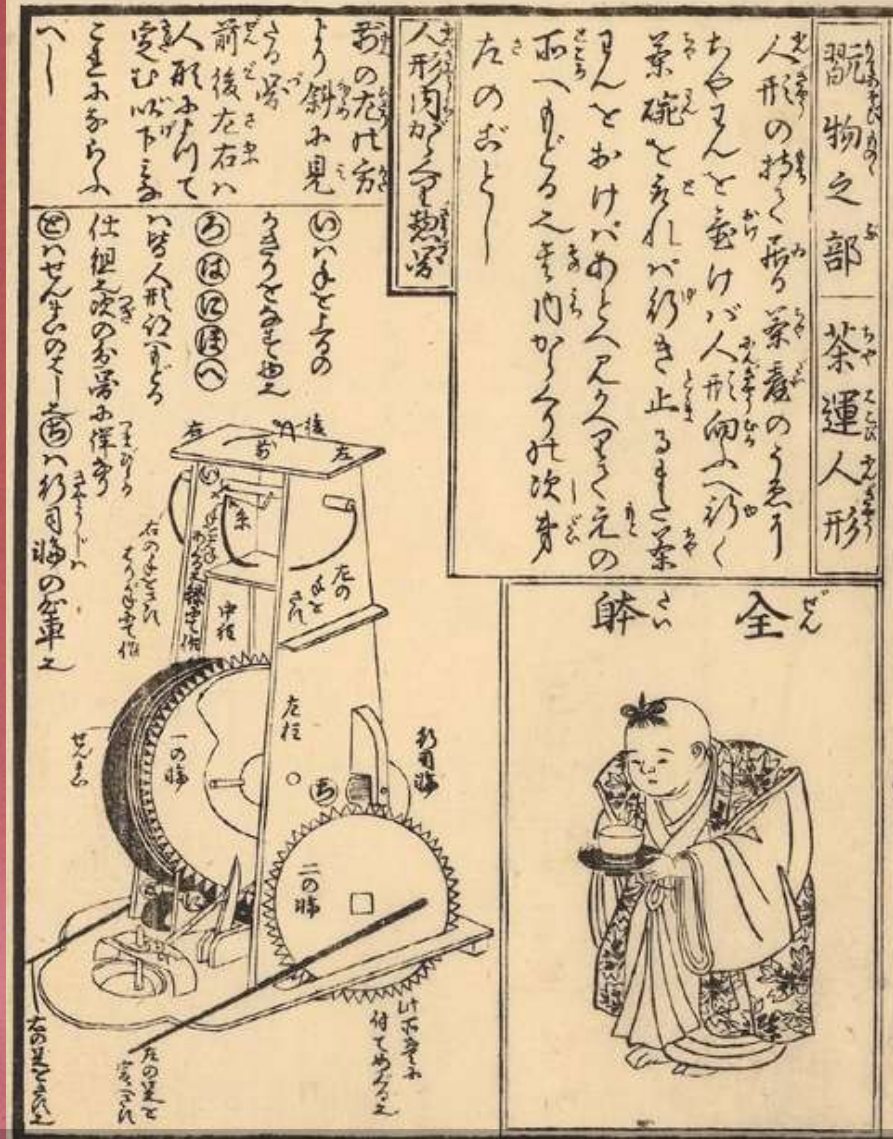
普及は、文学の発展だけでなく、技術の伝承や発達をも促した。

かなによる技術の伝承と普及

民族文字である「かな」の誕生と



江戸時代のからくり師（からくり半蔵）が書いた解説書



細川半蔵著『機巧図彙』（寛政8年(1796)刊 九大付属図書館蔵）

田中久重(1799-1881)が制作したからくり人形



?

遣唐使が廃止されて以降、日中
間の交流は民間貿易が中心に
なったといいますが、どのよう
なものが輸出入されていたので
すか？



第三節 日本のお出品



長安(現在の西安)

This is a topographical map of East Asia, specifically focusing on the Korean Peninsula and surrounding regions. The map uses color to represent elevation, with greens for lower land and browns/yellows for higher terrain. The sea is depicted in shades of blue. The Tang Dynasty is shown as a large green-shaded area covering much of the Korean Peninsula and northern China. The Silla Kingdom is shown as a smaller green-shaded area on the southern part of the Korean Peninsula. A line points from a label to a specific location within the Tang territory.

新羅
935年滅亡

唐
907年滅亡

10世紀の東アジア

1600BC	殷 1600BC頃-1046BC		
1500BC			
1400BC			
1300BC			
1200BC			
1100BC	周 1046BC-771BC		
1000BC			
900BC			
800BC			
700BC			
600BC	春秋戦国時代 770BC-221BC		
500BC			
400BC			
300BC			
200BC			
100BC	秦 221BC-207BC		
0	漢 206BC-220AD		
100			
200	魏 220-265	蜀 221-263	呉 222-280
300	晋 265-316		
400	五胡十六国時代		東晋 317-420
500	北朝 439-589		南朝 420-589
600	隋 581-619		
700	唐 618-907		
800			
900			
1000	五代十国 907-960		
1100	遼	北宋 960-1127	
1200	金 1115-1234		南宋 1127-1279
1300	元 1271-1368		
1400	明 1368-1644		
1500			
1600			
1700	清 1616-1912		
1800			
1900			
2000	中華人民共和国 1949-		



遼(契丹)

916～1125年

高麗

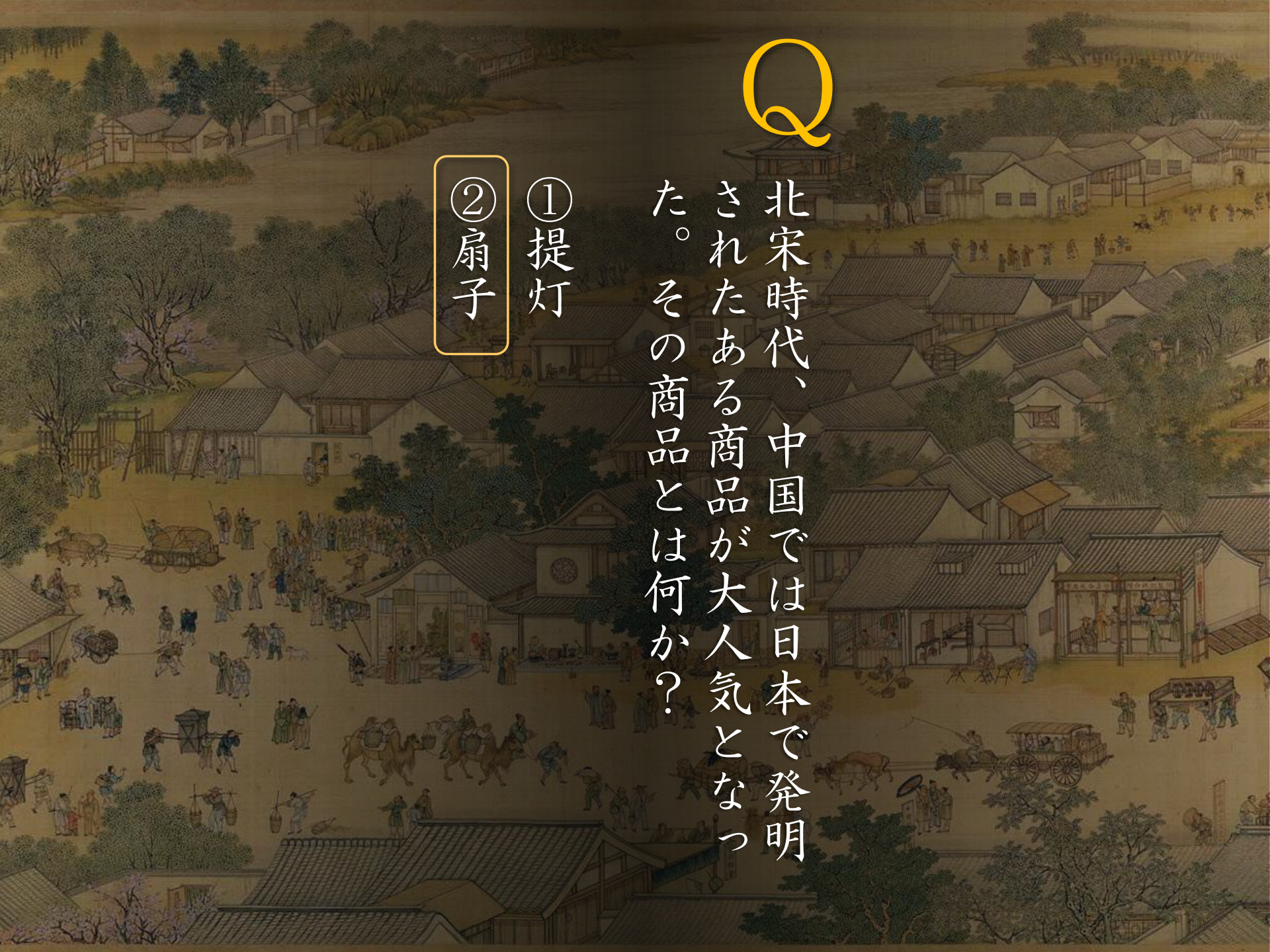
918～1392年

北宋の都 汴京
(現在の開封)

宋

960～1279年

10～12世紀の東アジア

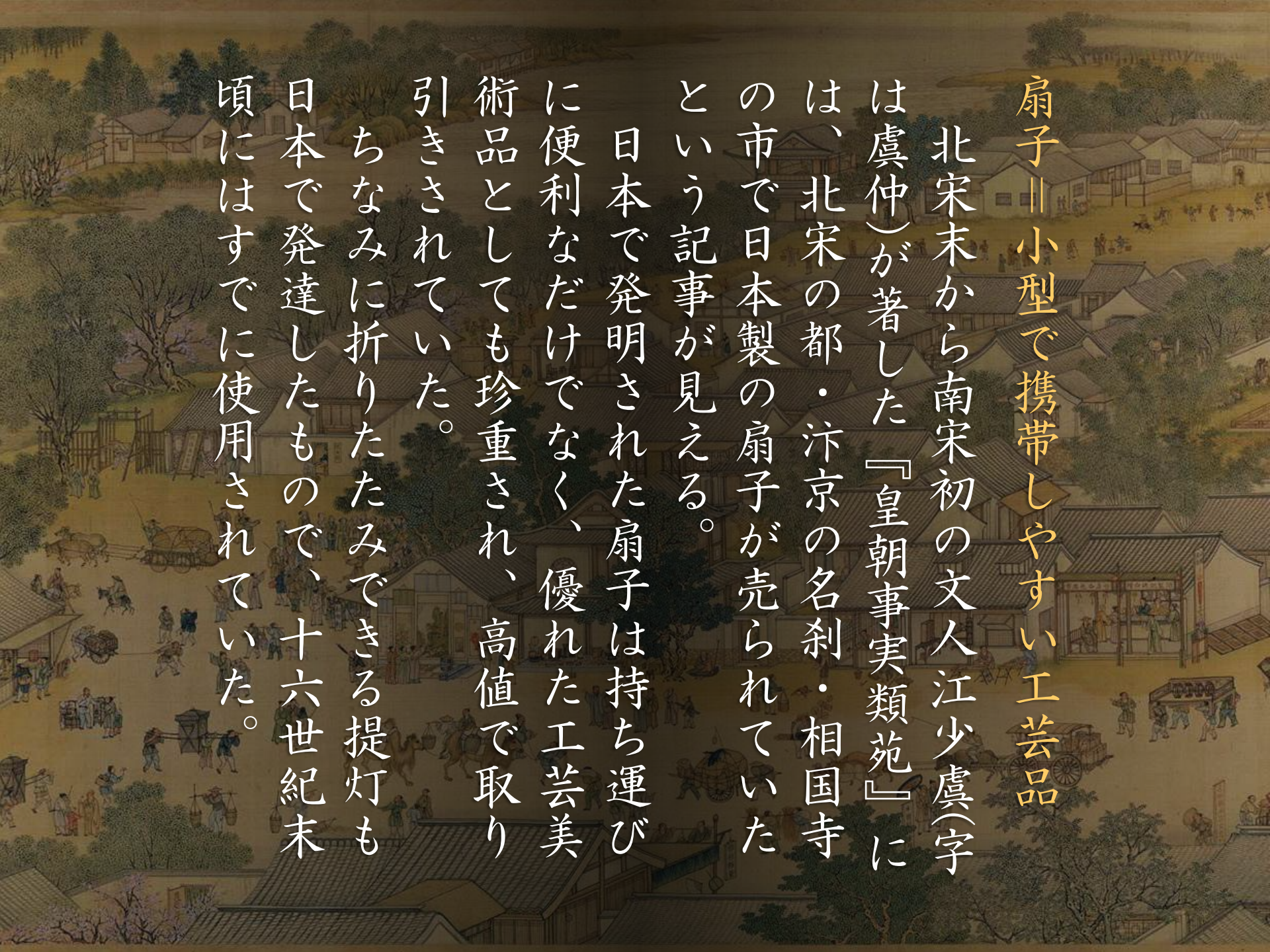


Q

北宋時代、中国では日本で発明されたある商品が大人気となりました。その商品とは何か？

① 提灯

② 扇子



扇子Ⅱ小型で携帯しやすい工芸品

北宋末から南宋初の文人江少虞(字は虞仲)が著した『皇朝事實類苑』には、北宋の都・汴京の名刹・相国寺の市で日本製の扇子が売られていたという記事が見える。

日本で発明された扇子は持ち運びに便利だけでなく、優れた工芸美術品としても珍重され、高値で取引引きされていた。

ちなみに折りたたみできる提灯も日本で発達したもので、十六世紀末頃にはすでに使用されていた。

日本の扇子

熙寧年間（一〇六八〜七七）の末、私が相国寺*に遊びに行つた時、日本国の扇子が売られているのを見た。

『宋朝事實類苑』卷第六十風俗雜誌一日本扇

*北宋の都・汴京（現在の開封）にあつた寺。門前以前では市が開かれ、世界中から集まつた品々が刻一取引されていた。所以合信也。環字刻刺史官氏云左雲麾將軍行磨美州刺史特節磨米州諸軍事高從政鐫刻陸工字小訛筆法精妙類歐陽率更書按唐貞觀中平高麗裂其地爲十二州各因其酋長以爲刺史磨米其一也。左符乃所頒者當在其國不知緣何遺於此也。壽光青屬邑其東瀕海矣。

日本扇

熙寧末余遊相國寺見賣日本國扇者琴漆柄以鸚青紙如餅搽爲旋風扇淡粉畫平遠山水薄傳以五彩近岸爲寒蘆衰蓼鷗鷺竝立景物如八九月間艤小舟漁人披蓑釣其上。天末隱隱有微雲飛鳥之狀意思深遠筆勢精妙中國之善畫者或不能也。索價絕高余時苦貧無以置之每以爲恨其後再訪都市不復有矣。

北宋の都 汴京
(現在の開封)



日本の扇子

漆の柄に餅のような厚い黒紙を張った扇子で、淡い色の山水画に五色で薄く色づけしてあった。近くの岸にはわびた蘆や蓼が茂り、鷗や鷺が直立している。八、九月ごろの景色だろう。小舟の上で漁師が蓑をかぶり釣りをしている。空のかなたには薄雲と飛ぶ鳥のようすが描かれていた。

『宋朝事實類苑』卷第六十風俗雜誌一日本扇
唐貞觀中平高麗變其地爲十二州各因其酋長以爲刺史磨米其一也左符乃所頒者當在其國不知緣何遺於此也壽光青屬邑其東瀕海矣

日本扇

熙寧末余遊相國寺見賣日本國扇者琴漆柄以鷗青紙如餅搽爲旋風扇淡粉畫平遠山水薄傳以五彩近岸爲寒蘆蓼鷗鷺竝立景物如八九月間藏小舟漁人披蓑釣其上天末隱隱有微雲飛鳥之狀意思深遠筆勢精妙中國之善畫者或不能也索價絕高余時苦貧無以置之每以爲恨其後再訪都市不復有矣

日本の扇子

絵の境地は深遠で、筆勢は絶妙である。中国の優れた画家もこれにはかなわないかも知れない。値段があまりに高く、当時私も貧しかったので、手に入れられなかったことをいつも後悔していた。その後、再び都の市を訪ねたときにはもう売っていなかった。分許所以合信也。環字刻刺史官氏云。左雲麾將軍行磨。荻州刺史特節磨米州諸軍事高從政。『宋朝事實類苑』卷第六十風俗雜誌。『日本扇』唐貞觀中、平高麗裂其地爲十二州、各因其酋長以爲刺史磨米其一也。左符乃所頒者、當在其國不知緣何遺於此也。壽光青屬邑、其東瀕海矣。

日本扇

熙寧末余遊相國寺見賣日本國扇者琴漆柄以鸚青紙如餅搽爲旋風扇淡粉畫平遠山水薄傳以五彩近岸爲寒蘆衰蓼鷗鷺竝立景物如八九月間藏小舟漁人披蓑釣其上。天末隱隱有微雲飛鳥之狀意思深遠筆勢精妙中國之善畫者或不能也。索價絕高余時苦貧無以置之每以爲恨其後再訪都市不復有矣。



清明上河図(北宋 張叔端)

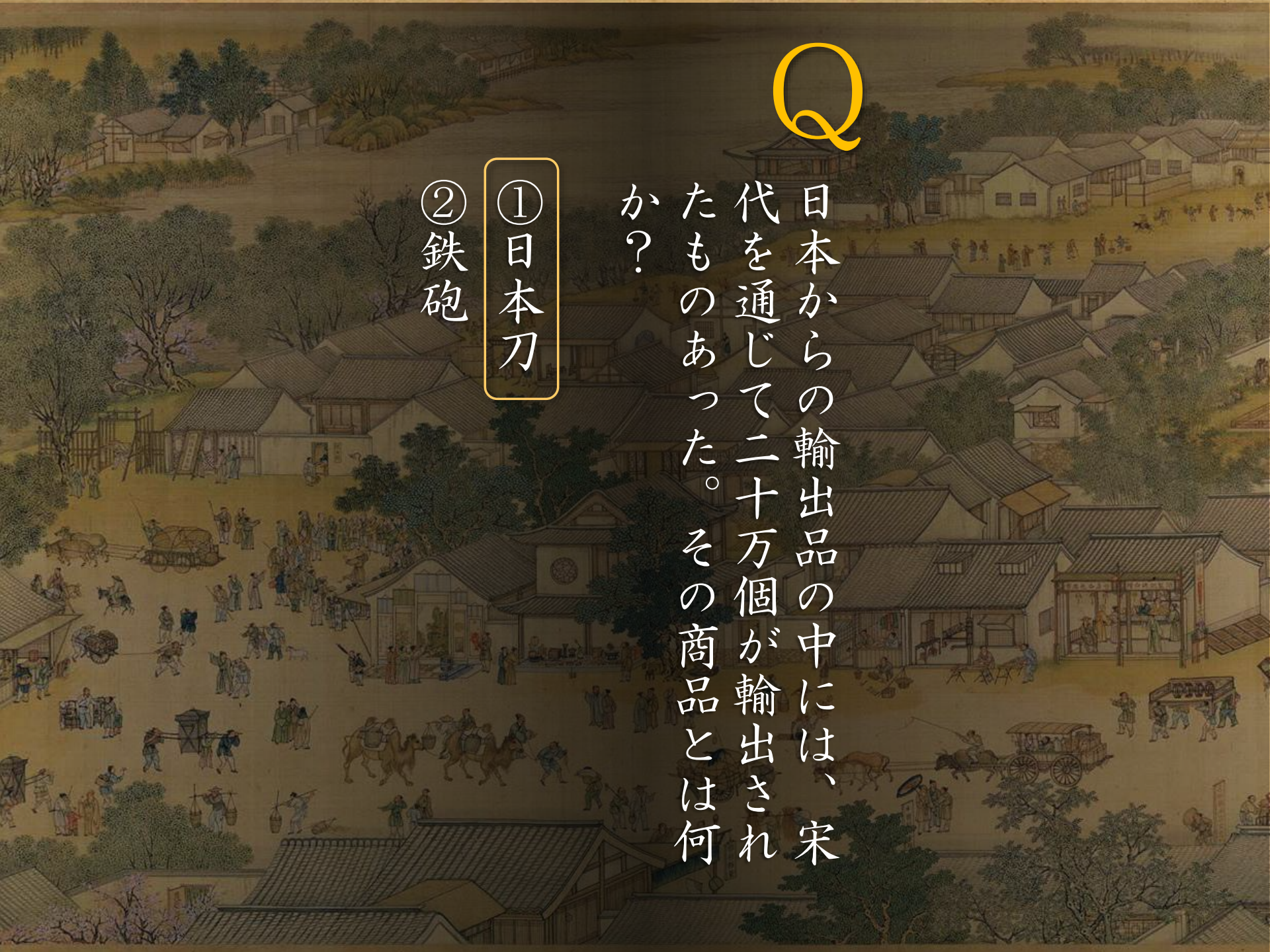


北宋時代の都・汴京の姿を描いた絵巻物

清明上河図(北宋 張叔端)



北宋時代の都・汴京の姿を描いた絵巻物



Q

日本からの輸出品の中には、宋代を通じて二十万個が輸出されたものがあった。その商品とは何か？

① 日本刀

② 鉄砲

日本刀歌

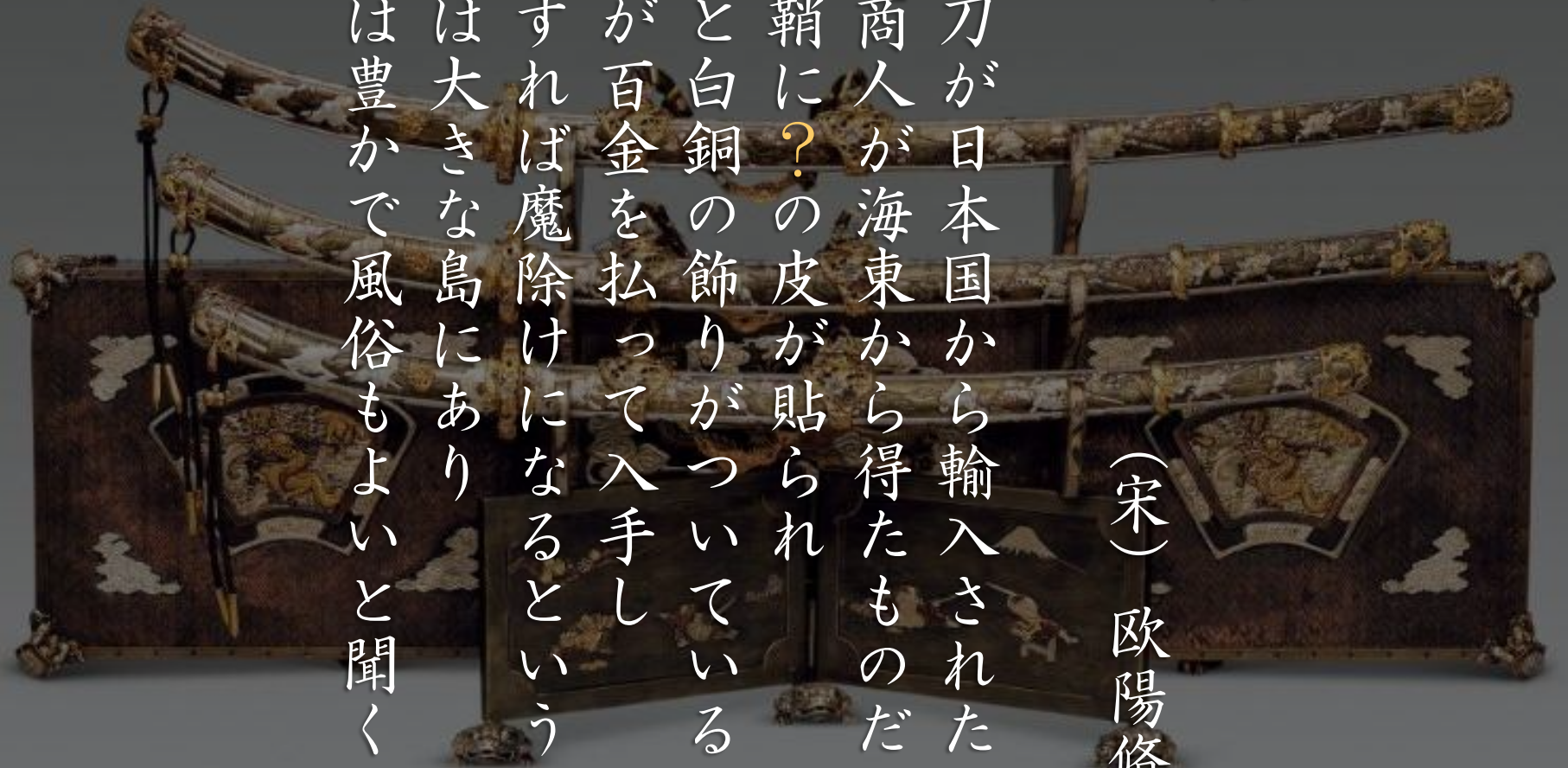
（宋）歐陽脩

昆夷道遠不復通
寶刀近出日本國
魚皮裝貼香木鞘
百金傳入好事手
傳聞其國居大島
其先徐福詐秦民
百工五種與之居
前朝貢獻屢往來
徐福行時書未焚
令嚴不許傳中國
先王大典藏夷貊
令人感激坐流涕
世傳切玉誰能窮
越賈得之滄海東
黃白閒雜鋤與銅
佩服可以禳妖凶
土壤沃饒風俗好
採藥淹留艸童老
至今器玩皆精巧
士人往往工詞藻
逸書百篇今尚存
舉世無人識古文
蒼波浩蕩無通津
繡澀短刀何足云

日本刀歌

(宋) 欧陽脩

最近宝刀が日本国から輸入された
越の商人が海東から得たものだ
香木の鞘に？の皮が貼られ
真鍮と白銅の飾りがついている
好事家が百金を払って入手し
佩刀すれば魔除けになるとい
う
その国は大きな島にあり
土地は豊かで風俗もよいと聞く



日本刀歌

(宋) 欧陽脩

むかし (秦の始皇帝の時代)

徐福は仙薬を取ると偽り

童男童女五百人余を率いて

海を渡った

久しく留る中に

みな年老いてしまったが

なかには職人や五穀もいたので

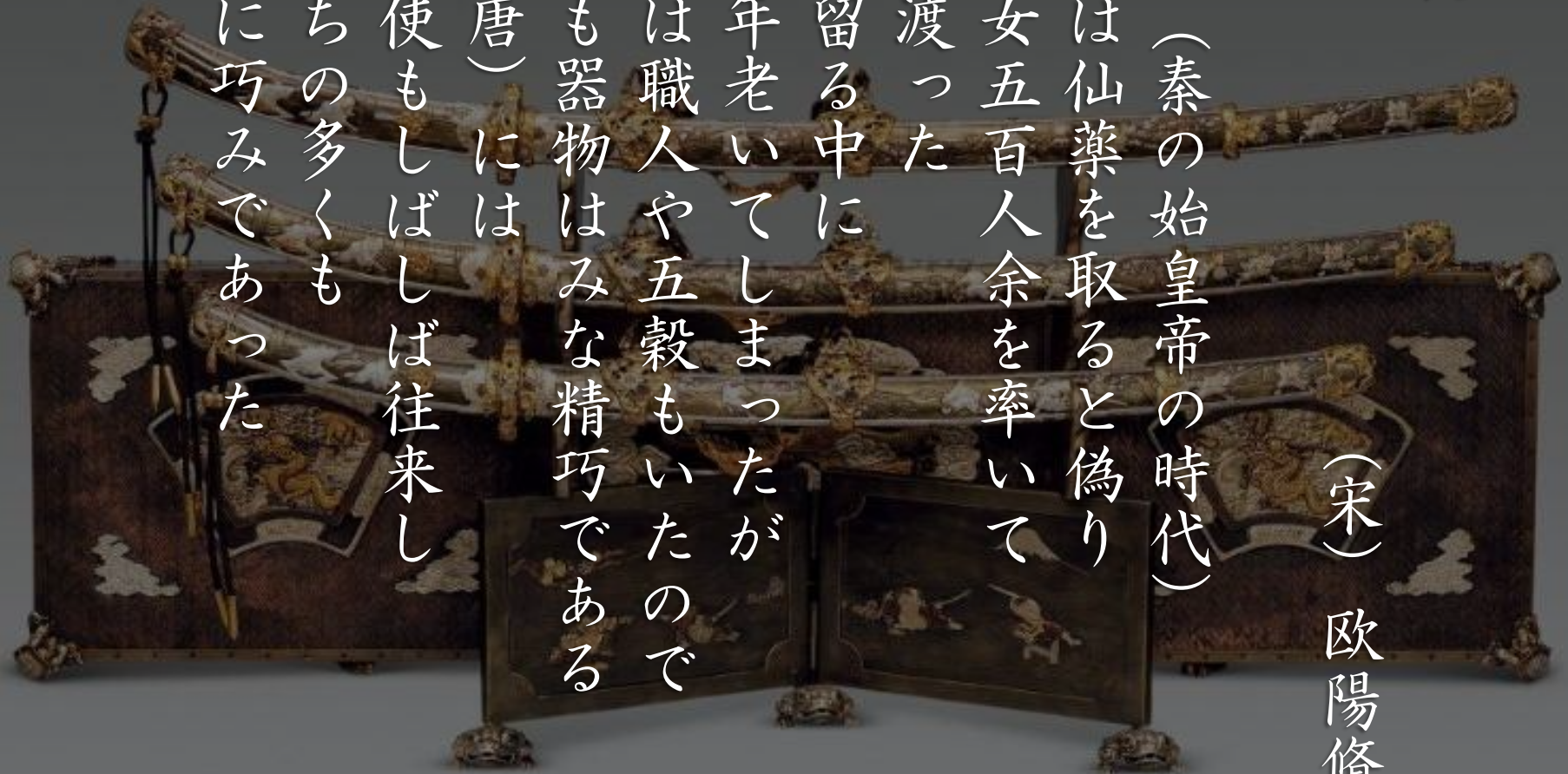
いまも器物はみな精巧である

前朝 (唐) には

遣唐使もしばしば往来し

士人たちの多くも

詩文に巧みであつた

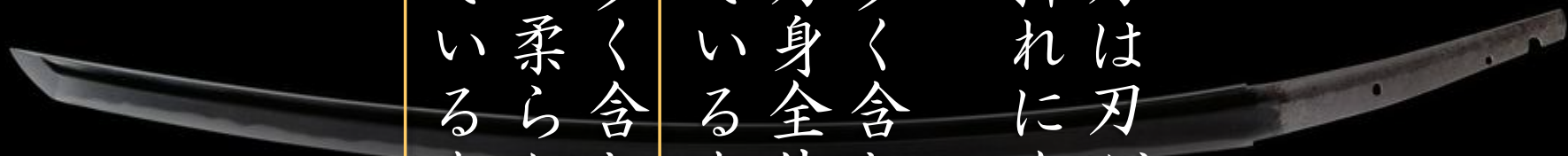


Q

なぜ日本刀は刃が鋭く、刀身が細いのに折れにくいのか？

①炭素を多く含む硬い鋼だけを
使い、刀身全体の硬さを一定
に保っているため

②炭素を多く含む硬い鋼と炭素
の少ない柔らかい鋼とを組み
合わせているため





国宝・古備前包平(こびぜんかねひら) (平安時代・12世紀、東京国立博物館蔵)

Q

日本刀の柄にはある動物の皮が張られている。その動物とは何か？

① 鮫

② 猫





沃懸地和歌浦蒔絵脇差(江戸時代 19世紀、東京国立博物館蔵)



文部科学省

MINISTRY OF EDUCATION,
CULTURE, SPORTS,
SCIENCE AND TECHNOLOGY-JAPAN



世界に誇る日本のクリエイティブ「日本刀」

柄巻師

遼(契丹)

916～1125年

北宋の都 汴京
(現在の開封)

高麗

918～1392年

宋

960～1279年

日本の輸出品

砂金	真珠	水銀
硫黄	木材	
螺鈿	扇子	日本刀

10世紀の東アジア



第四節 中国からの輸入品

遼(契丹)

916～1125年

高麗

918～1392年

北宋の都 汴京
(現在の開封)

宋

960～1279年

中国からの輸入品

香料	薬品	顔料
織物	茶碗	陶磁器
書籍	銅銭	

10世紀の東アジア

南宋の漢詩選集、4億6千万円で販売

中国の南宋時代、12世紀ごろに刊行された漢詩選集「唐人絶句」が11日、東京・飯田橋の古書展示即売会で、4億6千万円で売り出された。東京・神保町の古書店「一誠堂書店」が保有していた。中国にあれば国宝級とも言われる逸品に、古書ファンたちが見入っていた。

同店などによると、「唐人絶句」は南宋の文人、洪邁が唐の漢詩を編んだもので、杜甫が李白に贈った七言絶句も収められている。高度な技術による木版印刷

で、「宋版」と呼ばれる書物の一つ。

売り出されたのは全22冊のうち21冊。中国では散逸し、21冊がそろうのは極めて珍しい。同店が入手した経緯は不明だが、40年以上保管していたという。

室町時代の学僧、惟高妙安とみられる印が押してあり、遅くとも室町時代には日本に伝わっていたと考えられる。高橋智・慶応大教授(漢籍)は「中国にあれば一級文物(国宝)で、値段がつけられないほど価値がある」と話した。(上原佳久)



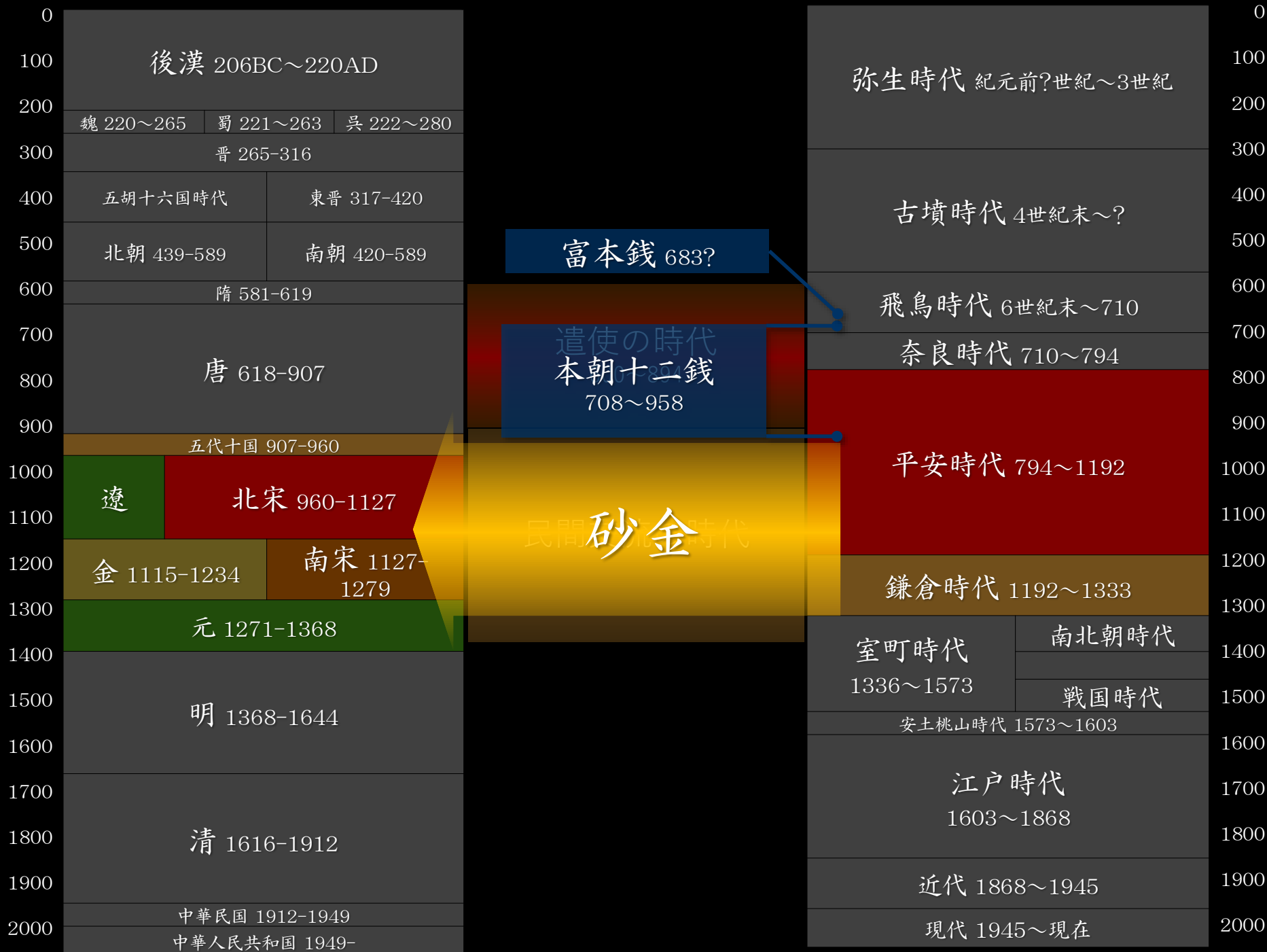


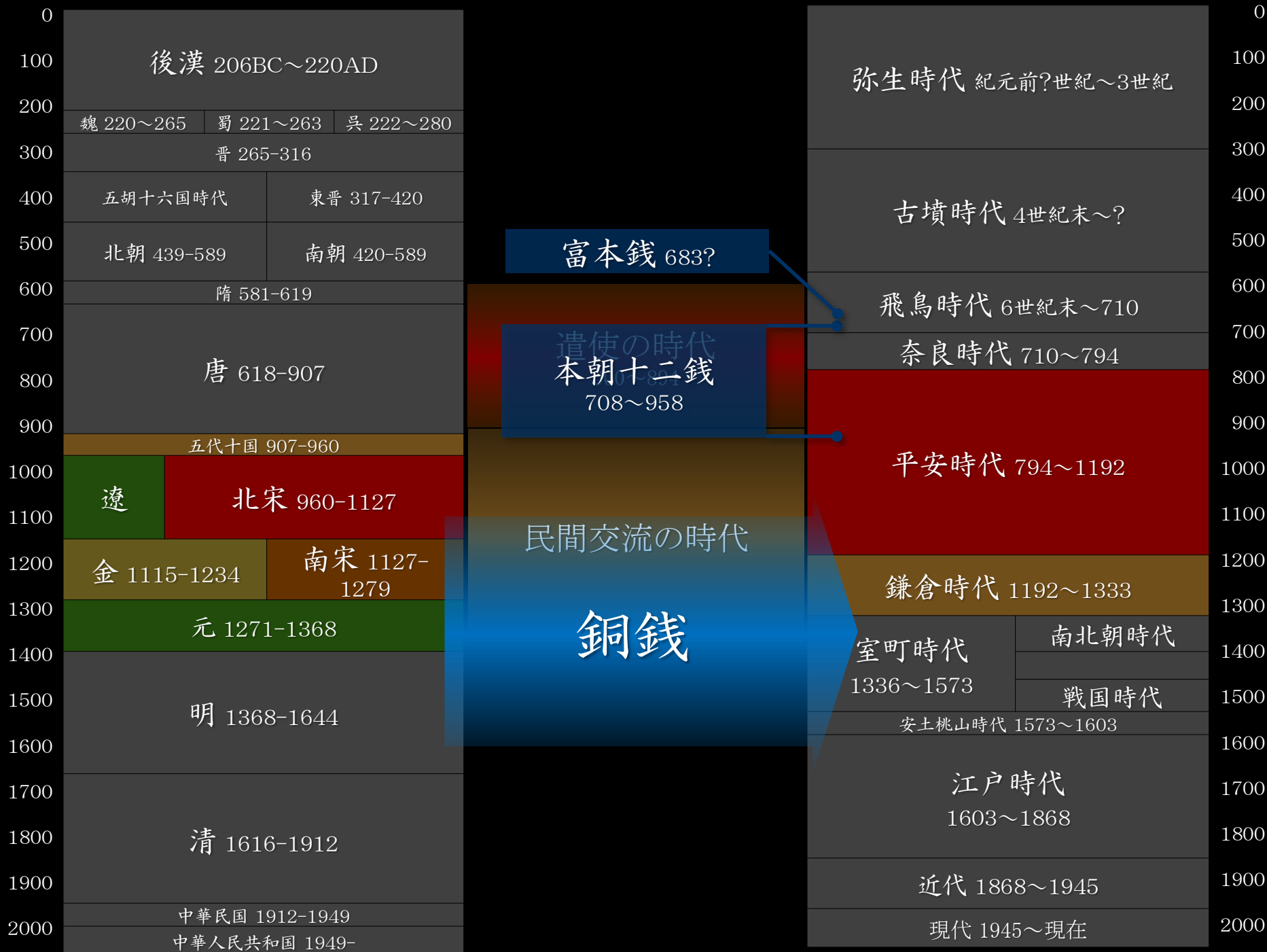
Q

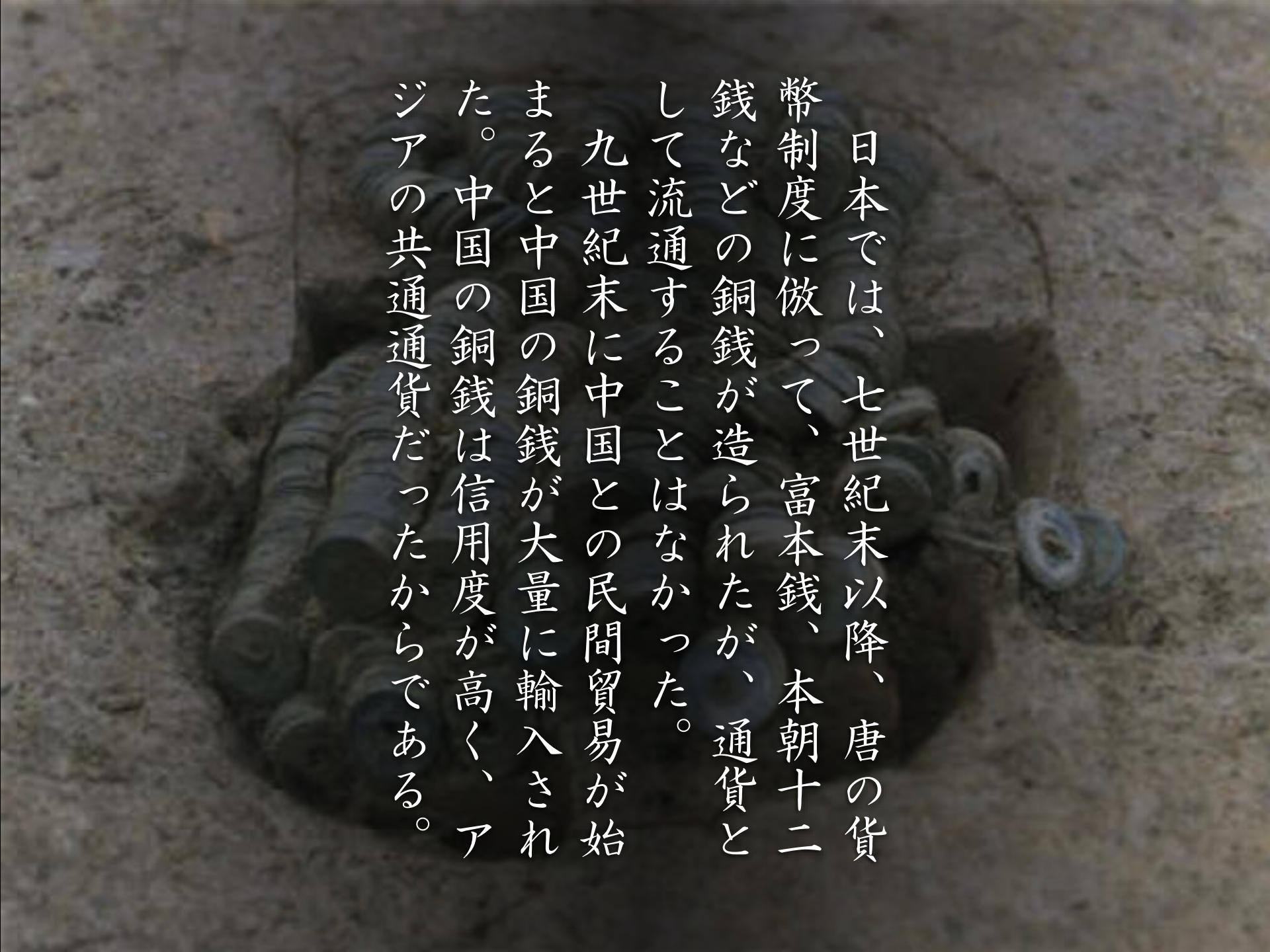
中国の商船との交易で、日本は
何によって支払いを行っていた
のか？

①銅貨

②砂金







日本では、七世紀末以降、唐の貨幣制度に倣って、富本銭、本朝十二銭などの銅銭が造られたが、通貨として流通することはなかった。

九世紀末に中国との民間貿易が始まると中国の銅銭が大量に輸入された。中国の銅銭は信用度が高く、アジアの共通通貨だったからである。

A large pile of ancient Japanese coins, known as Koban, is shown in a shallow earthen pit. The coins are dark, circular, and have a hole in the center. They are arranged in several neat rows, with some coins scattered around the edges of the pit. The background is a light-colored, textured surface, possibly sand or soil.

Q

鎌倉時代の初め、貨幣経済が未
発達だった日本では、輸入した
中国銅銭を使っているものが作
られた。それは何か？

①刀

②大仏



鎌倉高德院阿弥陀如来坐像(1243年?)



奈良東大寺盧舎那仏像(752年)

鎌倉の大仏様「素材は

別府大

「美男におはす」とうたわれた鎌倉の大仏様は、中国からもたらされた銭（銅貨）で造られたらしいことが別府大（大分県別府市）のグループの研究で明らかになった。平安時代末の12世紀半ば、中国銭は貨幣ではなく、銅製品の原料として輸入されるようになったというのだ。

（渡辺延志）

違い、民間主導の鎌倉の大仏は建立の過程でわからないことが多い。原料が何かは、その中でも大きななぞ。国産銅でまかなえた奈良大仏とは違い、鎌倉時代は銅が不足していたからだ。

手がかりは平安鎌倉期の銅製の経筒にあった。当時は末法思想が流行し、お経を筒に納めて地中に埋めた。同大の平尾良

光教授（文化財科学）が全国各地で出土した50点を調査し、含まれる鉛の同位体比を測定した。この数値で原産地を特定することができ、1150年ごろを境

切り替わったことがわかった。平安時代の後期、日本は銅不足に悩んでいた。8世紀初めからは和同開珎など12種類の銅貨が発行されたが、時代を追って小型化し、銅の割合が下がり鉛が多くなった。枚数も減り、10世紀半ばには製造が止まる。当時の製錬技術に見合う銅資源が枯渇したためと考えられる。

飯沼賢司教授（日本史）は経筒の分布を調べた。まず11世紀後半に九州北部に現れる。銅産地があったらしい。近畿や関東にまで広まるのは12世紀半ばで、このころ原料が中国産に代わっている。

この時期、多量の銭が輸入さ



●鎌倉大仏＝神奈川県鎌倉市
●時として多量の中国銭が出土する。7割以上は平安後期鎌倉半ばに相当する北宋・南宋のものだ。06年、福井市



国銭の流通が急に本格化する。銭の輸入が始まってから数十年たった後だった。

「輸入当初、日本で銭は流通していなかった。銭はもともと銅製品の原料として輸入され、余った分がしだいに通貨として使われるようになった」との結論を導いた。

『経筒が語る中世の世界』（思文閣出版）としてまとめられたこの研究に、黒田明伸東京大教授（中国経済史）は「日本で銭の流通が突然始まる理由が分からなかったが、疑問が解けた」と納得する。

銭鑄造はコストが高く、中国は国外持ち出しを禁じてきた。12世紀の半ば、南宋では紙幣の流通が安定したので、銭を持ち出しやすくなったのだらうと黒田さんは背景を考える。

この輸入銭の研究が鎌倉大仏と結びついた。平尾さんは以前勤務した東京文化財研究所で鎌倉大仏とその周辺の遺物を分析していた。その結果もすべて中国華南産を示した。奈良大仏は鉛を1%程度しか含まないが、鎌倉大仏は10%以上で中国銭に近い組成ともわかっていった。

別府大グループが解明

「美男におはす」とうたわれた鎌倉の大仏様は、中国からもたらされた銭（銅貨）で造られたらしいことが別府大（大分県別府市）のグループの研究で明らかになった。平安時代末の12世紀半ば、中国銭は貨幣ではなく、銅製品の原料として輸入されるようになったというのだ。

（渡辺延志）

銅の流通事情決め手

国家事業だった奈良の大仏と違い、民間主導の鎌倉の大仏は建立の過程でわからないことが多い。原料が何かは、その中でも大きな差。国産銅でまかなえた奈良大仏とは違い、鎌倉時代は銅が不足していたからだ。

手がかりは平安・鎌倉期の銅製の経筒にあった。当時は末法思想が流行し、お経を筒に納めて地中に埋めた。同大の平尾良

光教授（文化財科学）が全国各地で出土した50点を調査し、含まれる鉛の同位体比を測定した。この数値で原産地を特定することができ、1150年ごろを境

に一斉に国産から中国華南産に切り替わったことがわかった。

平安時代の後期、日本は銅不足に悩んでいた。8世紀初めからは和同開珎など12種類の銅貨が発行されたが、時代を追って小型化し、銅の割合が下がり鉛が多くなった。枚数も減り、10世紀半ばには鑄造が止まる。当時の製錬技術に見合う銅資源が枯渇したためと考えられる。

飯沼賢司教授（日本史）は経筒の分布を調べた。まず11世紀後半に九州北部に現れる。銅産地があったらしい。近畿や関東にまで広まるのは12世紀半ばで、このころ原料が中国産に代わっている。

この時期、多量の銭が輸入さ

れたことがわかっていて、まとまった量の銅が手に入る方法はほかに見あたらない。経筒の原料は中国銭の可能性が強まったが、銭には「簡単にはつぶさないだろう」との先入観もあり、飯沼さんらは銭の流通状況をたどった。国産銭の発行が止まってから2世紀以上をへて、日本では12世紀末、13世紀初めに中国銭の流通が急に本格化する。銭の輸入が始まってから数十年たった後だった。

「輸入当初、日本で銭は流通していなかった。銭はもともと銅製品の原料として輸入され、余った分がしだいに通貨として使われるようになった」との結論を導いた。

『経筒が語る中世の世界』（思文閣出版）としてまとめられたこの研究に、黒田明伸（東京大教授・中国経済史）は「日本で銭の流通が突然始まる理由が分からなかったが、疑問が解けた」と納得する。

銭鑄造はコストが高く、中国は国外持ち出しを禁じてきた。12世紀の半ば、南宋では紙幣の流通が安定したので、銭を持ち出しやすくなったのだらうと黒田さんは背景を考える。

この輸入銭の研究が鎌倉大仏と結びついた。平尾さんは以前勤務した東京文化財研究所で鎌倉大仏とその周辺の遺物を分析していた。その結果もすべて中国華南産を示した。奈良大仏は鉛を1%程度しか含まないが、鎌倉大仏は10%以上で中国銭に近い組成ともわかっていった。



⑤ 鎌倉大仏＝神奈川県鎌倉市
⑥ 時として多量の中国銭が出土する。7割以上は平安後期、鎌倉半ばに相当する北宋・南宋のものだ。08年、福井市



鎌倉高德院阿弥陀如来坐像(1243年?)



徳島県寺山遺跡出土銭(14世紀)

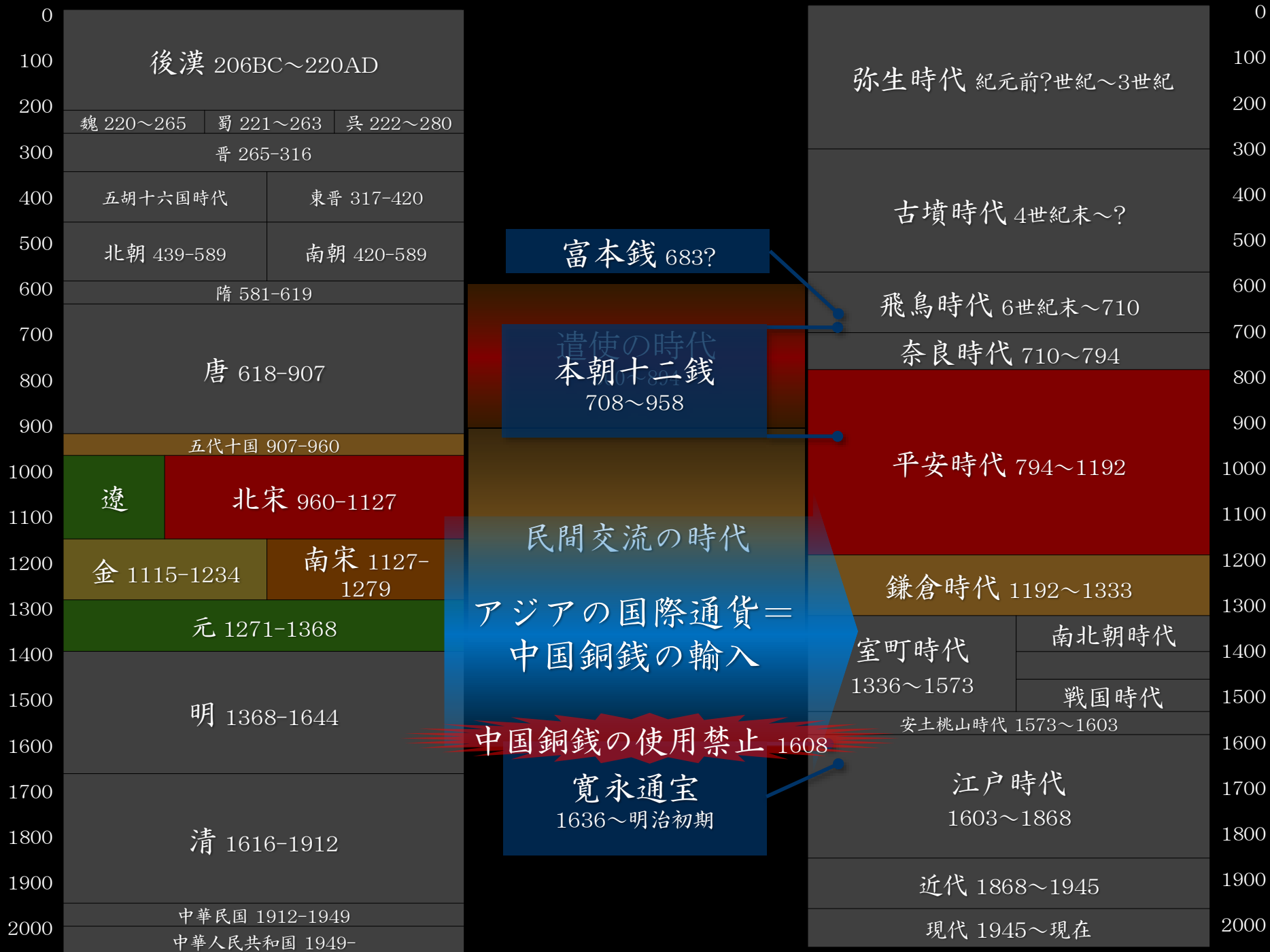


Q

鎌倉時代以降、日本ではアジアの国際通貨である中国銅銭が国内通貨としても利用されていたが、それはいつまで続いたのか？

① 明治維新まで

② 江戸時代の初め



Q

中国銭が流通するようになると、日本国内では質の悪い偽造銭が作られるようになった。この偽造銭を表す言葉は、いまも使われているが、それは何か？

- ① ペテン
- ② ビタ





鐳(びた)一文



参考文献

- ・吉見孝夫「『後奈良院御撰何曾』
「ははには」の謎々はハ行頭子音
の証拠たり得るか」(北海道教育大
学・語学文学五二号、二〇一三年)
- ・森克己「日宋・日元貿易と貿易
品」(『続々日宋貿易の研究』国書
刊行会一九七五年)
- ・森克己「大陸文化と日本扇」(『増
補日宋文化交流の諸問題』国書刊
行会一九七五年)
- ・蔡毅「飛竜衛士・韓志和」(『日中
文化交流史叢書・人物卷』大修館
書店一九九六年)
- ・王勇「日本扇絵の宋元明への流
入」(『日本美術史の水脈』ぺりか
ん社一九九三年)
- ・飯沼賢治『経筒が語る中世の世
界』(思文閣出版二〇〇八年)